

研究成果の概要

評価体制

<評価体制>

○総体的評価体制

基本的には中間報告で報告した内容と変わっておらず、各研究者間の相互理解を図る目的に本研究プロジェクト専用のホームページを設置し、学内 LAN を駆使して常時、学会抄録、論文等の成果物、研究打合せ、会合等の情報を直接ホームページ欄に送信して研究者間のコミュニケーションを円滑に行うシステムを構築した。各班研究グループ相互の研究成果についての理解、進展状況についての批判・評価を行い、第三者的な研究評価を進めると同時に相互に助言を得られるようにした。また、本プロジェクトによって設置した施設、設備の利用状況、機器使用訓練、機器アドバイザーへの質問、相談コーナーを設置して互いに成果の解釈、使用状況の円滑化、実験結果の評価システムの構築に努めた。

2 年目終了時までは、年 6 回、研究班の代表者による定例会議を開き、各研究班の成果を連絡しあいながら研究班の特性・専門性に基ついた相互評価を行い、評価内容を研究参加者へ周知させて研究計画の推進、改善に努めた。また、年 3 回研究全体会議を開催し、相互の研究成果について相互評価を行った。そして、中間経過報告会としてのシンポジウムを行い、研究の進捗状況を把握し、他の研究グループとの関連性や問題点を明らかにすることによって相互に評価を行った。さらに、研究の評価の一つとして研究費の配分に反映する体制を整え、配分方法などを研究費運用メモとして公開・周知させた。教育研究経費の 17% を傾斜配分枠として、各研究ユニット単位から毎年提出された研究計画書、研究予算書に基づく研究経過報告書をもとに、代表者会議により研究の進捗状況・発展性・研究実態を評価し、研究内容に応じて傾斜配分した。各研究班の自己評価方法として、peer review の審査システムをもつインパクトファクターの高い国際雑誌に成果を報告することを班員全員で確認し、学術雑誌への掲載情報を本学術フロンティア研究事業のホームページへ紹介しあうことで、相互評価体制を強化した。3 年目からは、代表者会議を年 8 回開催して、各班の研究内容と成果について実用化の有無についての評価を行った。

○研究班別評価体制

1. 口腔組織再生医学研究班

本研究班の研究内容は口腔組織再生をめざして細胞学的、生体機能学的な基礎医学研究アプローチを応用して推進するものである。新規代替埋入材料の開発と応用研究班と本研究班の成果と関連させながら実用性を前提とした生体材料の開発を行う事に視点を置き、両研究班の相互関係を踏まえた厳しい評価体制を採った。具体的には日常的に実験結果の情報を頻繁に交換しながら、互いの要望を提示しながら意見、アドバイスをを行った。

2. 新規代替埋入材料の開発と応用研究班

口腔組織再生医学研究班の項で述べたように当該班と密接な評価体制を採った。本研究班の中心ともいえる細胞・組織応用系、機能タンパク応用系、代替埋入材料の開発研究では代替材埋入手術後組織の骨形成促進が重要な鍵となることから、歯科先進材料・技術の開発と応用研究班と研究推進の連携をとる必要があり、日常的には実験結果の情報交換をしながら相互評価を行った。

3. 歯科先端材料・技術の開発と応用研究班

新規代替埋入材料の開発と応用研究班で述べたように当該班と密接な評価体制を採っており、とくにレーザー応用研究班では、本学理工学部量子学研究所のスタッフも含めた外部評価を行い、加えて量子物理学的な助言を戴いた。また、複数のレーザー照射装置関連会社が共同研究として参加しているが、当該研究所研究参加者から外部評価がなされ、新規レーザ

一照射装置の共同開発を進めた。

4. 先進診断技術の開発と応用研究班

本研究プロジェクトの内容から、先進診断技術の開発と応用を目指した各研究ユニットは充分研究成果を挙げているが、日常臨床に応用するまでにはさらなる研究推進の必要性を班会議、全体会議で評価を受けた。その一因としては診断技術を利用するにあたって企業参加のもとでの協力、助言が不可欠であり、共同企業研究者の評価を積極的に求めた。

5. 全身諸機能を基盤とする口腔環境の再構築研究班

本研究グループの研究成果、研究費使用状況と成果の効率性もプロジェクトの目標にそったものであると評価される。年度ごとの研究経過報告書に対する、全体会議でも同様の評価がなされた。実際に、研究成果が国内外の学会において発表され、また、インパクトファクターの高い国際学術雑誌に掲載されており、評価されるに値すると思われる。本研究プロジェクトのなかでも、研究成果の特許化、実用化に期待が持たれる研究内容であるため、実際に特許出願を多く出した。

相対的な外部評価の一助として、日本大学本部の NUBIC に研究者の学会発表の抄録を事前に送付して特許出願の可能性について評価をお願いし、これまでの NUBIC が依頼した外部評価委員から特許申請に値すると高い評価を受けて、出願しているものが多く出ており、外部評価が本研究の副次的効果として貢献していると考えられた。